

## 過信の反省

昨年末、立て続けに二回も転倒し、最初は高価な遠近両用眼鏡を二つ壊し、左目周囲は打撲による内出血で真っ黒になり、二回目には反対の右目の下を切って八針も縫った。左手の小指と薬指の根本付近の骨にはヒビが入り、右手首も痛めた。縫った傷は綺麗に治ったけれど、左手の小指と薬指はキーボードを使って書類を作ったりしていると、ローマ字仮名変換では、どうしてもa、s、d、eなどのキーを頻繁に使うことが多いため、今でもだんだん痛くなってくる。右手首は、最初は左の小指と薬指の痛みが強かったので、気にならなかったけれど、最近では、むしろ右手首の痛みの方が気になるようになっていく。

こんな羽目に陥ったのは、一口で言えば「加齢」ということなのだろうけれど、そのための対応策はいい加減にしてきたことだった。「ステッパー」に続いて「乗馬」も購入し、それなりにやってきたのだけれど、基本的に座っている時間が長く、移動にはついついタクシーや自分の車を使ってしまうため、足が弱くなったのが原因だったことに間違いない。

一回目は、友人を小一時間、近所の居酒屋で待たせてしまったことが発端だった。出ようとしたところ立て続けに何本も電話が入り、その対応に追われた。気が付いたら約束の時間が大幅に過ぎていた。急いで自宅マンションを飛び出し、商店街を走っていたら、いきなり乗用車が左の道から飛び出してきた。とっさにそれを避けたのは良かったのだけれど、僕も勢いが付いたので直ぐには止まれない。夕方の商店街通りの両側は違法駐車自転車で溢れ狭くなっている。避けるスペースは少し前の右側のコンビニの入口だけだった。で、そこに斜め横飛びに駆け込んだ。



愛用の PFU 社製のキーボード：無駄が少なく、使いが使うほど良さが分かる

下の写真で、僕は右奥に見える高層マンションから飛び出し、通りの左側を手前に向けて走っていた。自動車は、右側の「炭火烧肉」とある黄色の看板の横道から一時停止もしないで急に右折してきた。衝突を避けようとして、僕が横飛びに駆け込んだのは、左側の「長寿庵」という赤い看板の少し奥の場所である。



横飛びに駆け込みながら、まだ反射神経はそんなに衰えてはいないなどと少し得意になった瞬間、段差解消のためにコンビニ入口に敷かれた鋼板がたまたま濡れていて、滑った。勢いで前のめりに数歩進みながら、その先に並んでいた自転車に激突したら大変だと、本能的にそれらの狭い隙間に滑り込むように体の姿勢を変え、左側を下にして倒れ込んだ。それで左手を痛め、左顔面を殴打し擦りむいた。眼鏡も壊した。しかし、他人の器物を損壊することもなく、僕も直ぐに立ち上がったので、事件にはならなかった。急に飛び出してきた乗用車の姿も消えていた。

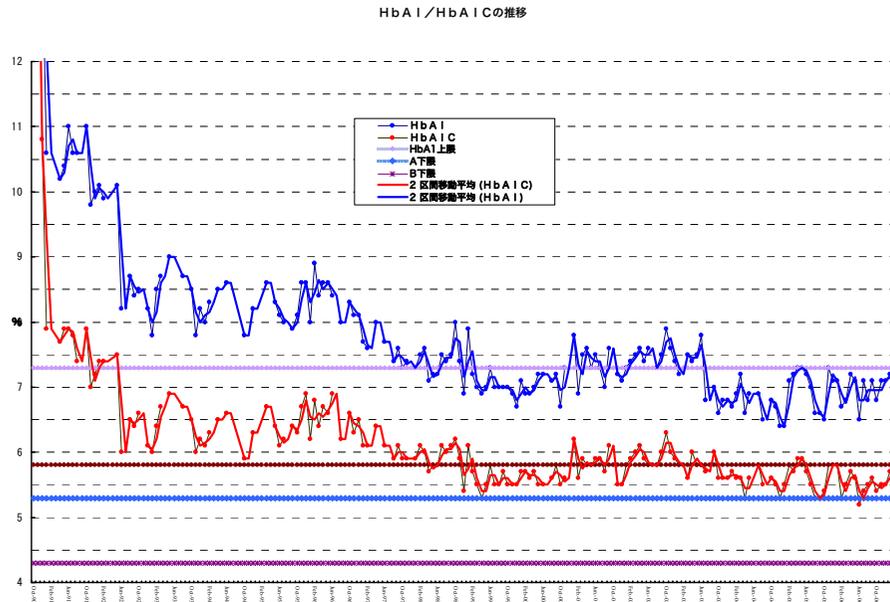
しかし、立ち上がって、左顔面に触ったら手に血が付いた。でも、大した痛みはない。左手の痛みも大したことはない。眼鏡は完全に壊れて修理できない状況だったので、コンビニのゴミ箱に捨て、手で左顔面を覆いながら、ともかく友人が待っている居酒屋に急いだ。そこから歩いて二分も掛からない距離にあるからだ。

そこでお絞りを何本も貰い、傷口を拭いて、たまたま店の主人が持っていた「馬油」を塗ってもらい、さらにお絞りで上から強く圧迫しながら、小一時間待っていた友人に詫びを言い、飲み始めた。「お前、大丈夫か」と彼は心配する。しかし、酒が入ったら痛みも鈍感になり、それよりも彼との利害抜き気楽な話で盛り上がり、「大したことはない。僕も歳になったし、これから気をつけるよ」と言いながら最終的には十一時過ぎまで飲んでしまった。

その間、店の主人が気づいて頻繁に新しいお絞りを持ってきてくれ、血染めになったお絞りを交換したのだが、友人と再会を期して別れた頃には、僕の出血は止まっていた。彼は僕のケガの状況に心配し続けながらも、僕が元気そうで大丈夫と言っているもので途中からは普段通りになってしまった。

もちろん、彼も僕の様子が本当に変だったら付き合うはずがない。僕も本当に変だと思ったら、そして僕自身がそのことを自覚していたら、迷わず直ぐに数分で行ける、分野はいろいろだけれども何人も主治医がいる東京女子医大に行く。と彼にも店の主人にも言った。さらに僕が自分自身の状態を認識できず、客観的に見て異状だと感じたら、迷惑を掛けるけれども、迷わずに僕を東京女子医大に問答無用で運び込んで欲しいとも付け加えた。

大雑把に言うと、僕の過去約二十年間の各種検査データが東京女子大にはデジタル化され保存されているからだ。だから緊急事態に陥った場合には、どこよりも最短時間で、余分な検査を省いて、最適な処置をしてくれるだろうと信じているからだ。その一例が右下の表である。これは僕の一九九〇年十月以来の、過去約二ヶ月間の血糖値管理状況の指標とされている、ブドウ糖が血中のヘモグロビン（脊椎動物の赤血球の赤い色素。酸素を運ぶ機能を持つ。Hemoglobin、Hbと略記）に結合した「HbA1C」の毎月の値の推移である。これを四・三％〜五・八％に維持していれば、まず糖尿病の「合併症」は起こらないとされている。インシュリンを分泌する膵臓をほとんど摘出して以来、一日の食事の回数にもよるけれど、だいたい、一日、三回はインシュリン注射を行うという生活を二十年あまり続けている。



インシュリンそのものが遺伝子工学のお陰で格段に良くなり、注射後、直ちに効果を発揮し、一〜二時間で作用しなくなるという超即効性とか、約二十四時間、ほとんど同水準で作用する超遅効性など様々なインシュリンが開発され、それらを組み合わせることで血糖値管理は昔とは比較にならないくらい楽になった。

注射器も、かつては、普通の注射器を使っていたのだけれど、今はまったく違う。

使い捨ての直径〇・二五ミリという極めて細い針が一体となったものを、インシュリンが中に入っている太めの万年筆のようなものの先に取り付け、必要量の目盛りに合わせて押すだけで、消毒などせずにシャツの上から適当に打っていても、まったく問題は起こらない。お陰で、いろいろ無理もしているけれど、それでもだいたい五・八%以下に管理できるようになっている。優等生である。

小一時間も待たした上に、血だらけの当人が、そんなことまでも言って自慢するので、呆れると同時に、待たされたことに対する文句は言いたいし、と言って血だらけなもので心配だし、どうしたら良いのかと迷ったはずの友人も諦め、普段通りにやることになった。大丈夫だろうと思っただけに違いない。それでも別れ際まで「お前、本当に大丈夫か」と気遣う。大丈夫だから早くタクシーに乗って帰れと言って友人を見送り、数分なもので僕は歩いて自宅マンションに戻った。

身体を過信するのは僕の性癖らしい。若い頃は山歩きで鍛えた。今のテントとは違って夜露を含むと一段と重くなる帆布製テントを含め三十キロぐらいを背負い、数日間、三千メートル級の山が連なるアルプス連峰を縦走しても何ともなかった。高校大学時代に関東地方・中部地方の山はほとんど踏破した。運動部所属の同僚などと比べても「足」だけは自信があった。そして酒も強くて自信があった。ところが三十九歳で、それも酒の飲み過ぎが基本で脾臓をやられて倒れ、約一年間の入院生活を余儀なくされたところ、ガクンと足までもが弱くなった。

退院後、体調が安定してからは、まず散歩を行い、水中ウォーキング教室にも通い、さらに自宅ではステッパーや話題の「乗馬」マシンでトレーニングするなどいろいろやったところ、ある程度まで回復した。日常生活には支障がないところまで回復した。



それで、もう還暦も過ぎたし、この一、二年は加齢だから仕方がないと勝手に納得して鍛える努力を怠ったところ、その報いを受けた。一群の女性陣が水中ウォーキング教室を占拠するようになり、だんだん通いにくくなり、それでついには止めてしまったことが、一番、まずかったようだ。夕方になると足がむくむようになったのが前兆だった。心臓には問題はないのだが、重力に逆らって足の血液を心臓に戻す「第二の心臓」——足の静脈にある血液の逆流防止弁——の機能が、それを支える周囲の足の筋力が弱ったためだ。それでも大丈夫だと過信していた。

一回目の事故の背景には、こんな事情があった。しかし、その後でも、①とつさに自動車を避けた反射神経を維持していたこと、②それと被った打撲や切り傷も大したことではなく数日で治ってしまったもので、身体は大丈夫だという自信は揺るがなかった。翌日、念のためにマンションに併設するクリニックに行っただけで、「もう傷は大丈夫だ、適当に消毒し、気になるならバンドエイドでも張っておけば良い。左手の骨にも異常はない。これから内出血で左目の周囲は真っ黒に。パンダのようになりが、一、二週間で自然に消えるから心配はない」と言われた。

確かに左目の周囲は黒くなり始めた。しかし、痛みはない。ただ無様で、外出の際には眼帯をした。大勢の人が出席し、そこで一定の役割を果たさなければならぬというような公の会議に出席するのは躊躇した。僕が絶対に出席しなければならぬ、出席しなくても何とかなる、二、三の会議の出席は取りやめた。

しかし、予定済みの少人数の会合は、なかなかそうはいかない。眼帯は鬱陶しいので席に着いたら、事情を話し直ぐに外すという形で参加した。酒も飲み続けていた。左目の周囲もそんなには黒くはならなかった。

そうしたら二回目のケガをやってしまった。一回目のケガは火曜日の夕方にしたのだが、同じ週の金曜日の夕方にまた転倒してケガしてしまった。

息子二人が来る日だった。もらった肉があつたもので、それを使ってすき焼きでもやろうと、マンションに併設するスーパーに材料を買いに行った。ネギ、春菊、焼き豆腐、白滝などと、ウイスキー、ワイン、ビールなどを買い、野菜などを入れた軽い方の袋は痛めた左手に、そしてウイスキーやワインやビールなどを入れた重い方の袋は右手にぶら下げてサンダルをつっかけて右写真の地下駐車場に通ずる坂道を下つて、その背景にある自宅マンションに戻った。

この坂道を使わなくてもマンションには行けるのだけれど、地下一階に郵便受け・宅配ボックスがあり、そこをチェックしてから部屋に戻ろうと思い、この坂道を下つて行くことにした。そうしたら坂道の最後の近くで、滑り止めのために作られている輪っば状の窪みにサンダルを引っ掛け、前のめりに転倒してしまった。この坂道の下面は写真からも想像できる通り、緩やかだけれどやや不規則な凹凸を持っている。そのことは何度も使い知っていて注意はしていたけれど、左目に眼帯をしていたため遠近感に問題があつたのが、直接の原因だった。

反射的に痛めた左手をかばうと同時に、右手にぶら下げたウイスキーやワインの瓶を壊したくないとかばったもので、頭から、それも痛めた左目をかばったもので、反対の右顔面を強く打ってしまった。



もちろん眼鏡は壊れた。眼鏡がないと、郵便受けの鍵の番号も合わせることはできないから、郵便受けをチェックに行っても無意味である。壊れた眼鏡のプラスチックレンズで目の下あたりを切ったらしく、血が大量に滴り落ちるけれど、痛みはない。どうも一回目とはケガの仕方が違うと思いつながらも、幸いにもウイスキーやワインの瓶は割れなかったので、それらを抱えて急いで部屋に戻った。自分の二十八階にある部屋に行くまでの間にも、エレベータの床には血が滴り落ちる。汚してはまずいと、血は買ひ物の袋の中に落ちるようにして戻った。

鍵を開け、部屋に入って、直ぐに洗面台に向かった。見たら顔は血だらけだった。洗って、傷の状況を見た。かなり切れている。傷口をぬぐっても、すぐに血が吹き出てきて、傷口が分からなくなる。傷口をティッシュで強く押しながら、消毒薬、脱脂綿、ガーゼ、テープやバンドエイドなどを探した。長年の経験から、ほとんどの医療用品や医薬品を持っているからだ。

それがこういう時には役に立つ。血が滴り落ちるのは止めることができた。少しホツとし、血で汚れた床を拭き、血で汚れた服を洗濯機に放り込んでから、買ってきたものを取り出し、すき焼きの用意を始めた。野菜や焼き豆腐や白滝などを切って大皿に盛り、知人に頼んで送ってもらっている米を研いで、炊飯器のスイッチを入れ、鍋を取り出し、必要な食器などと共にテーブルに適当に置いた。

夕食の準備も一段落したので、再び洗面所でケガの様子をチェックしたら、ガーゼもテープも血をいっぱい含み、今にも血が滴り落ちそうになっていた。それで処置をやり直したら、また血が吹き出てきた。

僕は、糖尿病の合併症を避けるために「バイアスピリン」という錠剤を飲んでいて、血栓の発生を予防するための薬で、そのためケガなどをすると、血が止まりにくくなっている。何事も一長一短である。「クソ」と叫んで、再度、血を綺麗に拭き取って、手当をやり直した。見苦しいけれど、ともかく格好はついた。

その直後に息子二人が現れた。僕の様子を見るなり、どうしたのかと詰問きつもんされた。事情を話し、大したことはないから心配するなど言った。それに対して「少しは年齢を考えて注意しろ！」などと説教を始めるので、「分かった。これからは注意する。でも、そんなに心配することはない。自分自身のこととは一番分かっている。夕食の準備は出来上がっている。ともかく食って、飲もう。俺も腹ぺこなだけだから………」と、詰問きつもんを遮りさへぎ、普通に飲み食い始めた。

ところが、その最中に、再び手当をしたところから血が滲にじみ出てきた。大丈夫と僕は言い張ったのだけれど、息子たちはともかくどうなっているのか見せろと言う。テープなどを剥はがし、傷を見たら「これは酷ひどい、直ぐに東京女子医大に行こう。折角、こういうことも考えて、歩いて直ぐに行けるとところに住んでいるのだから………」と怒り出した。

今、いるところは、旧フジテレビ本社跡地一帯の再開発により建てられた計四棟のマンションのうちの最も高層の一号棟である。その東側の入口から撮ったのが下の写真で、中央の茶色の建物が東京女子医大病院の病棟の一つである。マンション敷地内の緩ゆるやかなスロープを上がりきったところが、緊急患者の入口になっている。



しかし、僕は、もう酒が入って強気になり、しかも痛みがないもので、「緊急患者で行くのは嫌だ」と言い張った。口論になった。再度、息子たちに手当をやり直してもらい、その部分を「アイスノン」で冷やし、文句を言い続ける息子たちを無視し、「明日、一番で東京女子医大に必ず行くから、今日は俺はもう寝る」と言い放はなつて、自分の部屋に入って寝てしまった。

翌日、息子たちと一緒に朝一番で東京女子医大に行った。そうしたら「形成外科」で医者から馬鹿と怒られた。「ともかく、これだけの傷口だと縫うしかない。しかし、だいたい切ってから六時間ぐらいの間に縫わないと、傷口は綺麗にはならない。何故、昨晚、緊急でも良いから来なかったのか。」「縫うけれど、時間が経ちすぎているので、上手く付くかどうか分からない。」「などと散々驚かされた。

部分麻酔用の注射をブスブスと打たれた。これが最初は本当に痛かったけれど、数本打たれたら痛みを感じなくなった。そうしたところで医者は傷口の状況を詳細に調べ始めた。「おお！ 意外に傷口の状況が良いじゃないか。これならひよつとすると上手く付くかも知れない」——そんなことを若い二、三人の女医さんにいろいろ説明している中で言ったのが聞こえた。「これじゃ駄目だ。もっと細かい針と糸を持ってこい」などと言う声が聞こえたのを最後にウトウトと眠ってしまった。

「終わった、八針縫ったよ。」と声を掛けられて起こされた。そして「念のために化膿予防の抗生剤と痛み止めを四日分処方するから、四日後にまた来なさい。薬は様子を見て問題がなければ、二日ぐらいで止めて良い。」と言われ、さらに脳のCT検査など一連の検査を受けるようにと言われた。「整形外科」の出番である。

その結果、現時点で脳に異常はないけれど、一週間後ぐらいには、念のために再度CT検査を受けるように言われ、さらに左手の骨には細かいヒビが入っていると言われた。左手首に骨折跡があり、その部分の少し上が相対的に弱く、そこに力が加わったためヒビが入ったのだろうと言われた。左手首はしかし、とくに治療する必要はなく、痛ければ湿布でも貼っておけば良いという。

四日後、「形成外科」に行った。すると「おお！ もう綺麗に付いている。抜糸しよう」と言い、僕が「抜糸した後で傷口がまた開くことなんてないですか」と心配になって聞いても「大丈夫！」と断言する。「ハイ、抜糸の用意！」と看護婦に命じる同時に、そこに横になれと僕は命じられ、あつという間に抜糸され、上からテープを

貼<sup>は</sup>って、「ハイ、終わり」と言われた。「テープは傷口が紫外線などの影響で黒ずむのを防ぐもので、普通の薬局にはないけれど、東京女子医大の売店には置いてある。三百円もしないから、それを帰りに買って、数日間、貼<sup>は</sup>っていれば良い。肌色のテープなので傷を隠すのにも良い。」それで終わりである。

「糖尿病だというのに、それに歳なのに、えらく傷の治<sup>なお</sup>りが早いね！」と馬鹿にされたのか、誉<sup>ほ</sup>められたのか、そう最後に付け加えられた。

そんなことがあった後、今年一月中旬、僕が二十歳代から公私ともお世話になっている先輩夫妻などと夕食を楽しんだ。都心にあるのだけれど、一步、中に入ると都心にいることを忘れさせる店だ。

オープンしてから間もない頃、友人に連れて行ってもらった。以後、何回も行く機会があつて、いつの間にか店長とも仲良くなって無理を聞いてくれるようになった。混んでいて、なか



なが良い場所を予約できないのだけれど、頼み込んだら、たまたま人目に付かない庭園にある「離れ」の一室を用意するという。もちろん特別の追加料金など払うつもりはない。一番安いコース料金である。誰もが自腹でやるのが暗黙の了解事項で、その前提でアレンジしてきているので、その旨を連絡して集まった。

それまでにも金沢に蟹<sup>かに</sup>を食べに出かけたり、京都で食事と寺院巡りに行ったり、神楽坂でふぐ料理を楽しんだり、四谷にある「隠れ家」のような店で茶会席に挑戦したり、いろいろやってきている。参加メンバーは、最大でも十人前後、利害関係は全くない。ただ気楽に楽しむということで、適当に集まっている。僕が一番若いもので、いつの間にか幹事のようになっている。

その席で、僕は昨年末の一連の出来事を話した。そうしたら面白いジョーク、いわゆる民族性関連ジョークを紹介された。それは「スコッチ」の生みの親のスコットランド人に関するものである。残念ながら、その話を際だたせる前置きの他民族に関する部分は思い出せないのだけれど、スコットランド人に関する部分は覚えている。だいたい次のような話である。

スコットランド人がポケットにスコッチの瓶びんを入れて歩いていたら、自動車にはねられてケガをした。担架たんかに乗せられ病院に運ばれている時に、彼は足を伝わって何やら液体が滴したたり落ちていることに気が付いた。そうしたら彼は、「ああ神様、どうかこれが血でありますように」と言ったという。

腹を抱えて笑った。もし、僕が二回目の転倒の際に、右手にぶら下げている酒瓶さかびんが割れることなど気にせず、それを放り出せば、ケガをしたとしても遙はるかに軽微であったことは間違いない。合わせても三千円ぐらいの酒瓶さかびんを無意識に守ってしまい、それで二十万円近い遠近両用の高級眼鏡を壊し、八針はちはりも縫ぬうケガをしてしまったことに通じるジョークである。大笑いした後、今度、同じようなことになったら、僕は絶対に酒瓶さかびんを放り投げて我が身を守ると先輩たちの前で誓ちかった。

このところ謝あやまること多い。コンピュータ関連では、僕が最初に教えたにもかかわらず、すでに立場が逆転していたけれど、今回の出来事で、僕は息子たちにまったく頭が上がらなくなった。素直に耳を傾けると約束した。悲しくもあり、嬉うれしくもある。自分では、臍すいぞう臓を病み、約一年、生死をさまよう入院生活を経験し、その後、まったく変わったと思っていたものの、いつの間にか再び「過信」するようになっていたということを確認した。以来、「反省」し、必死に歩くように努めている。地下恐怖症で地下鉄が嫌いだったが、我慢してできる限り利用している。その効果もあって、足が夜にむくむこともなくなってきた。